大学児童教育学科 50 年に寄せて

－短期大学部時代を基盤とする保育者養成の歴史と使命－

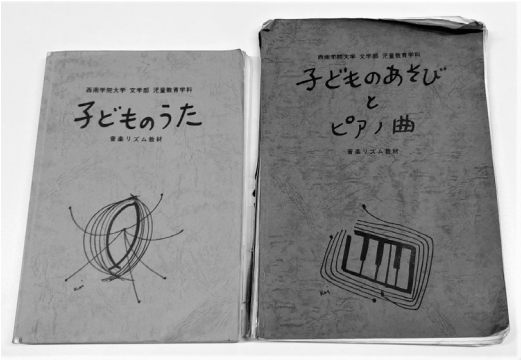
土田　珠紀

１．彩り豊かな６号館の思い出

私が児童教育学科に入学したのは、短期大学部から４年制となって約 10 年を経過した頃である。その数年後に小学校教職課程が設置されるまでの期間、女子学生限定の学科であった。現在の大学図書館の向かい側、言語教育センターの場所に児童教育学科の講義が行われる「6 号館」があり、練習室からピアノの音色が聞こえ、７月には大きな七夕飾りに色とりどりの短冊、クリスマスはキリスト降誕場面を再現した馬小屋が飾られ、キャンパス内では異色の空間と言えたかもしれない。

私の学生時代､土曜日には障がい児とその保護者のサークル「のびっこ」が開かれ、堺太郎先生や井上哲雄先生のゼミ生が、先生方にご指導を受けながら中心となって活動内容を企画、運営していた。私は、故・中川ノブ先生のゼミ生で小児栄養学を学ぶ仲間とともに、その子どもたちに手作りのおやつを提供する役割を担っていた。６号館１階の小児栄養学実習室で、クッキーやお好み焼き、クリスマスにはデコレーションケーキを作ったことを覚えている。当日になってのんびりその日のメニューを相談し、西新商店街に材料の買い物に出かけるなど、なんとものん気な状況であった。加えて、食物アレルギーや衛生管理などの面からも、これこそ古き良き時代とも言えるのであろうが、現在ではとても考えられないことである。

また、児童教育学科の学生は、保育・教育実習はもとより、幼児体育やピアノなどの日常の授業についても、着替えたり移動したり練習したりと、学内の他学部の学生に比べて忙しかった印象である。さらに、まだ東キャンパスがなかったため西南会館の学食は遠く、児童教育学科の学生の多くは昼休みに６号館の教室でお弁当を広げながら、宿題の工作を仕上げたり、ピアノの楽譜を眺めたり、うたを覚えたりしていた。うたを覚えるというのは、通称「赤本（あかほん）」と言われた児童教育学科オリジナルの教科書にたくさん掲載された子どもの歌をうたう、故・森川和子先生の音楽の授業準備のためである。（因みに「青本（あおほん）」もあり、これは児童教育学科学生必携のピアノ曲集である。）歌をうたう授業と聞くと、何やら楽しそうな授業風景



オリジナルの教科書「赤本」「青本」

が目に浮かびそうである。しかし実際は、森川先生のピアノの前奏が終わると席順にひとりずつ伴奏にあわせて歌いはじめ、先生の「はい」の合図で続きを隣の席の学生が歌い継いでいくという、イントロクイズのアレンジ版のような内容であった。森川先生の「はい」は、フレーズの節目ではなく、イレギュラーなところで唐突にやってくるため、神経を研ぎ澄ましながら手に汗握る 90 分であった。もちろん、本を開くことは許されず、歌詞も覚えメロディーも暗譜することが求められていたので、6 号館のランチルームでは「(歌詞に出てくる) 馬－ろば－牛の順‥‥、顔が細い順と覚えよう！」などという会話が飛び交っていた。当時はいたって真面目、必死に取り組んでいた記憶があるが、今思うとなんと和やかな光景であろうか。今現在も大切にしている、既に色あせた赤本を開くと、あの時のスリル満点な緊張感とともに森川先生の軽やかなピアノの音が聞こえてくるようだ。

児童教育学科の 4 年間に学んだ専門理論と実践的な教科によって習得したさまざまなことが、実際に保育者となってどのように生きていて活用できているのか、具体的に説明ができるものがなく、学生時代にまじめに取り組んでいなかった事実だけが明確である。思い出すことは、探求心をもって勉学に臨んだ記憶ではなく、上述のとおり講義そのものではない周辺の雑多なことである。しかし、大きなキャンパスにいる大勢の学生の中のひとりでありながら、そこにいる存在感、所属感をもって 4 年間を過ごすことができたという実感がある。このことについて考えてみると、例えば、故・尾崎恵子先生は絵画工芸の講義の中で、学生が制作した作品それぞれに対し丁寧に具体的な言葉で評価をしてくださっていた。その言葉は、教員から学生への評価というよりも、ご自身の感性による作品そのものへの深い興味と、それを制作した学生の表現や創造性への尊敬から湧き出るような、鋭く、深く、温かいものであった。当時は

漠然とした感覚でしかなかったものの、学生本人の個別性が尊重され、私個人としての存在が認められている実感を持てていたように思う。これはおそらく、短大時代から先生方が大切に守ってこられた、大きな組織の中の誰かではなく、個人として人として他者を尊重する教育理念が、４年制の大学となってからも先生方によってしっかりと守られ、教育者・保育者を養成する場が、同時に、キリスト教に基づいた人間教育の場となっていたからではないだろうか。人としての構えや心持ちを、教員として他者とのかかわりそのものから学生に示し、伝えてくださった先生方に対し、今、尊敬の念に堪えないという思いである。

２．保育界の現状に生きる４年間の学び

当時、保育者の養成校は短期大学が主流で、「4 年も行くの？」というのが世間一般の認識であったように憶えている。つまり、必要なのは免許取得のために要する時間であり、2 年間で充分というように解釈されていたのであろう。このことは、「保育」の社会的な意義や価値の認識と関連し、昨今の保育界が持つ諸問題の根底に燻るものである。そして高校生であった私自身は、保育学を学ぼうと信念をもって４年制大学を選んだという記憶は全くなく、唯一合格したのが児童教育学科であったという消極的なスタートであった。しかし卒業後 30 余年保育の現場に身を置く中で、この選択の意味を強く感じている。

近年、子どもを取り巻く社会のさまざまな問題が次々に顕在化する中、それらの影響を強く受け、保育所の役割は多様化している。そして保育者には、それぞれの場や出来事に対応するための専門的理論の習得と、学び続ける意欲や実践知を積み上げていく知恵とエネルギーが求められている。さらにその土台には、他者と対話しよりよい関係を構築するコミュニケーション力、ものごとを多面的に捉えると同時にその本質を逃さず、且つ柔軟に対応する力など、保育者という以前に人としてどうあるべきかを問いながら、強く生きていく力が必要である。実際に、保育者の配置基準、低賃金や過重労働など、個人や施設単位では解決できない問題が山積みの現状で、それらに起因していると考えられる離職率の高さ、そして保育者不足は社会問題ともなっている。その中でも、一日も止まることなく、子どものよりよい育ちを志向し、適した環境を整え、集団の利を生かしながら個人を尊重した関わりを大切に考えて実践を重ねていくことが求められるのが、現代の保育の現場である。加えて近年は、小学校以上の教員不足問題も深刻化し、将来の社会を担う子どもの教育・保育の場が、過酷で辛く厳しいものであること、またそのような認識ばかりが拡がり、課題の大きさと根深さを考えさせられる毎日である。そのような現状にあっても、保育者を志し、実践

知を重ねながら子どもから学び、同僚と協働的な関係を結ぶ保育者を養成するために、４年という時間は決して長くはない。直接的に保育や教育の学問に関わらないことも含め、経験を広げ、視野を広げ、軸となる確固たる子ども観、保育観の基礎を構築するのには、短いとも思える貴重な期間である。

短期大学部時代について先生方や諸先輩方から伺う話から、当時は教員と学生の距離が近く、学生同士も深く関わり合いながら、そこが協働的な学びの場であったことが推察される。保育者養成校は、そこで学んだ学生が方々に拡がって保育に携わり、保育現場で出会う対象の子どもに深くかかわる。言い換えると、保育者を養成することが、１人の学生が保育現場で関わっていく多くの子どもたちの豊かな育ちを間接的に支えているという構図である。つまり私の諸先輩方が、さまざまな保育現場において、人生の基盤を培う乳幼児期の子どもたちに対し、西南学院が目指す人間教育を実践的に展開されてきたということである。短期大学部から当時は珍しかった４年制大学への転換は、保育者を養成する意義の実感と、西南学院としての使命にも似た積極的な動機付けがあったのではないだろうか。そしてそれらを支えたのが、卒業生のそれぞれの実践における誠実な日々の営みと活躍であり、それを基盤として、多くの保育者がここで育っていることに、先生方、先輩方の尊く、心を尽くした教育、保育に感謝でいっぱいである。

数年前、西南学院大学のホームカミングデーを機に、児童教育学科同期の同窓会が行われた。振り返ってみると大学入学式の翌日、オリエンテーションの際に故・上野武先生が「みなさんは、ここで勉強をしようと思って受験して入学されたでしょうが、みなさんが本学を選んだのではなく、神様がみなさんを選んだのです。」とおっしゃった。当時、その意味を真に理解はできなかったが、心からの安心を感じた記憶がある。神様が選んでくださった私たちが出会い、それから数十年を経て集った仲間は、卒業してから現在も継続して、保育現場に勤務したり、障がい児施設で専門的な療育を行ったり、あるいは家庭の子育てを支援する事業に取り組んだりと、保育や教育に関連する仕事に従事する同窓生が多かった。長く務めているというだけではなく、それぞれ自分の仕事に対する理念が感じられ、数十年前にともに学んだことの意味付けがなされ、心強さを感じるとともに、それぞれが辿った道に思いを馳せるひとときであった。保育者を目指す４年間は、「人を育てる人」としての基盤を培い、自分自身の幅を広げ厚みを増していくためのかけがえのない貴重な時間ではないだろうか。そういった意味でも、短期大学部時代の尊ぶべき歴史を礎とした４年制大学への転換という本学の選択の価値を、保育現場にいながら強く実感している。

３．これからの時代に求められるキリスト教保育

私が勤務する西南学院早緑子供の園は、第二次世界大戦中に保育者養成校の校長福永津義先生が、学生と一緒に戦災孤児や引き揚げ孤児を引き取って育てられたことから始まっている。当時、何とか調達したミルクを飲ませようとしても、吸って口に取り込み、飲む力がない赤ちゃんが亡くなったという記録もある。歴史を紐解くと、戦中・戦後の混乱期に、心を尽くし、身を尽くし、幼い子どもたちの成長を祈り、尽力された方々の尊いお働きへの思いが募る。その歴史の上に立つ早緑子供の園の歩みを、今後もずっと守り継続していくことが私たちの使命である。その後、西南学院の施設となり、現在の保育所としての機能を備えることとなった。早緑子供の園では、設立当初から受け継がれてきた１人ひとりを大切にするという、根源的な理念を掲げている。そして子どもたちが神様から愛され守られている安心感を持ち、自分が大切な存在であることを実感しながら成長してほしいと願う。そのため私たち保育者は、今、目の前の子どもをどのように抱き上げるか、どのようなまなざしで見守るか、１人ひとりの子どもの豊かな育ちを支えるための細かな１つひとつのかかわり、援助の方法や内容を検討しながら、日々の保育を進めている。

子どもを取り巻く社会については、家庭の養育力低下や地域コミュニティーの希薄化など、私が保育者となった当初とは全く違った課題が、その時代を反映して次々と生まれている。そして激動・不確実・複雑・曖昧な VUCA[1] な世界と言われる現代、社会情勢の変化や世界レベルの課題も多い。そして子どもたちが生きていく未来は、技術革新が進み、価値観や他者との関係性、職業観なども、今とは全く違った様相となっていることが想像できる。そのような未来の社会を担うために求められる力が、自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力、発想力や柔軟で創造的な力、批判的な思考力と言われている。保育の質が注目されて久しい中、私たち大人は、自分自身も想像し難い未知の社会に対応し、そこで生き抜く力を子どもに育むことの難しさを痛感している。今現在も、教育・保育機関、家庭における問題や事件などが散見され、社会の課題の根深さを感じるところである。

以前、子どもの育ちに関する園児対象の研究調査が行われた際、「自分の後ろのものは見えないが、音は後ろからも聞こえるのはなぜか？」という、科学的認知に関す

---

1 「VUCA（ブーカ）」とは、Volatility（変動性）・Uncertainty（不確実性）・Complexity（複雑性）・Ambiguity（曖昧性）の頭文字をつなぎ合わせた言葉。これら４つの要因により、現在の社会やビジネスにとって、極めて予測困難な状況に直面しているという時代認識を表す。

神様に愛され、守られて成長する子どもたち

る質問に対し、「神様がそんなふうにからだを作ったから」と回答した子どもがいた。この回答は、科学的思考の発達度ではない観点で、子どもが神様を信じ、すべてを委ねる安心感を持っているからに他ならないと感じたエピソードで、その子どもが自信をもって即答した姿を今でも憶えている。１人ひとりを個として受け止め、存在そのものを尊ぶことは、キリスト教が基盤となった保育実践という域を越えて、どの子どもにも、どのような教育・保育現場にも中心となるべきテーマである。そしてその信念によって育まれるのが、自分に対する自信、有能感から生まれる自己を肯定する力、そしてその自己の力を土台とした、人とかかわり他者の中でよりよく生きる社会性ではないだろうか。このように考えると、キリスト教に基づく人間教育、世界観というものは、乳幼児期の子どもに育みたい力として、誰もがどの時代にも求めるものである。つまり、学生時代から賛美歌を歌い、神様の御言葉に触れながら、同時に保育の理念、子どもの心や体の発達、保育者としての在り方などを学ぶ学生生活は、保育や教育の原理原則を軸とした保育観・子ども観そのものの土台を培うことと言える。このように、長い年月、保育の場に身を置き、様々な子どもたち、保護者の方々、保育者仲間に出会い、また、その時代を反映するかのように遭遇する多様な課題に対応する中で、西南学院大学における保育者養成の価値や使命の大きさ、重さ、尊さを感じる毎日である。

短期大学部時代から４年制大学に転換して現在に至るまで、未来の子どもたちを育てる真の保育力を培うべく、キリスト教を柱とした教育理念とそれぞれの深い専門性

を基に、温かく力強く保育者養成にご尽力してこられた、たくさんの先生方に心から感謝を申し上げたい。そして短期大学部時代に、教員からのアプローチではなく自らアクティブラーニングと言えるような学びの場を構築し、積み重ねられた歴史を尊び、その諸先輩方の土台の上に現在があることを、多くの方々と共有し、記憶にずっと留めていたい。その歴史を受けての現在、保育者を志望する学生も以前に比べてかなり減少しているのが現実ではあるが、それぞれの場において、この4年間で心のうちに培われた力を信じ、自分を信じ、その力を社会に活かしてほしいと心から思う。

感謝と願いとともに、児童教育学科の50年に思いを寄せて。